

## 論文紹介

# 「言語活動を充実させ、説明する力を高める社会科授業の研究—中学校社会科地理的分野『世界の諸地域』を事例として—」を読んで

Review of the study of lessons on social studies focusing the language activities at a junior high school

岡崎 夕貴 OKAZAKI Yuki (和歌山大学大学院教育学研究科 教職開発専攻スペシャリスト コース1年生)	芝 拓実 SHIBA Takumi (和歌山大学大学院教育学研究科 教職開発専攻授業実践力向上 コース修了生)	宮橋 小百合 MIYAHASHI Sayuri (和歌山大学教職大学院)
--	---	--

受理日 令和5年11月15日

**抄録**：本稿の目的は、芝拓実氏の「言語活動を充実させ、説明する社会科授業の研究」について、優れた点を紹介し、成果と課題について考察することである。芝氏は、「資料の関連付け」と「話し合いによる学習の支援」という課題意識をもって、検証授業を計画し実施した。この取組は、言語活動をいかに充実させるかという今日的な課題にアプローチしたものであるといえる。社会科の資料を読み取り、関連付けるというコンピテンシーを生徒に獲得させる有効な取組となった。本項では、芝氏の研究の優れた点を中心に紹介する。

**キーワード**：言語活動、思考プロセス、可視化、話し合い、評価規準、フィードバック

## 1. はじめに

本稿は、2019年度に和歌山大学教職大学院授業実践力向上コースを修了した芝拓実氏（以下、実践者と呼ぶ）の「言語活動を充実させ、説明する社会科授業の研究」の修了研究についてのレビューである。その研究は、以下の3点が優れている。①研究の対象を明確に焦点化している点、②「関連付けて説明する」ための思考のプロセスを整理し、実際の授業の中に、思考のプロセスを再現している点、③評価の規準を明確に設定し、児童がどの段階にあるのか、実態を正確に把握して的確なフィードバックにつなげることができた点である。以下、実践者の研究の優れた3点について詳しく紹介する。

## 2. 研究対象の焦点化

実践者は、「言語活動」という広いフィールドを、「社会科」における言語活動に絞り、さらに「資料を関連付けて説明する」活動へと焦点化している。実践者がフィールドを絞っていく過程を追う。

まず、平成29年告示中学校学習指導要領解説総則編

より、「生徒の発達段階を考慮した言語活動の必要性が求められている」点を確認している。（下線は第一筆者による。以下同様）

次に、学習指導要領解説社会編（2018）より、社会科における言語活動について述べた一文「資料等を有効に活用して論理的に説明したり、立場や根拠を明確にして議論したりするなどの言語活動に関わる学習を一層重視する。」を引用し、言語活動の中でも、資料等を有効に活用して論理的に説明する活動に注目している。

また、資料の活用について、「資料から読み取った情報を基にして社会的事象の特色や意味などについて比較したり関連付けたり、多方面・多角的に考察したりして表現する力の育成が不十分である。」との一文を学習指導要領解説社会科編（2018）より引用し、「資料の活用」の中でも育成が不十分とされる「関連付けたり、多方面・多角的に考察したりして表現する力」に注目している。

このようにして実践者は、言語活動という広いフィールドにおいて、「社会科」における「資料の関連付け」に絞って研究を行うことを明言している。

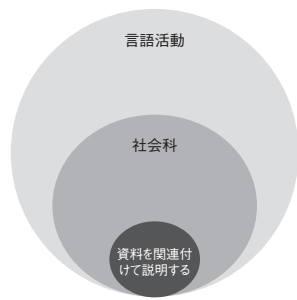


図1 研究対象の焦点化イメージ (第一筆者作成)

### 3. 「関連付けて説明する」ための思考のプロセスの整理、及び思考のプロセスを組み込んだ授業プラン

ここでは、以下3点について概観することを目的とする。1つ目の目的は、実践者が実践の拠り所とした理論について、先行研究を踏まえて概観することである。2つ目の目的は、先行研究より導き出した成果と課題を整理し、実践者の研究仮説を確認することである。3つ目の目的は、実践者が先行研究の知見を基に考案した「思考プロセスを可視化させる授業実践」の目的と成果について概観することである。

#### 3.1 「関連付けて説明する」ための思考のプロセスの整理

実践者は、社会科において言語活動で育成される「言語力」とはどのようなものかについて、先行研究をふまえて定義づけを行っている。

まず米田 (2017) を取り上げ、現行の学習指導要領をもとに、「言語力」について、「読み取り」「解釈」「説明」「論述」の視点からとらえ、社会科の言語力の4つの過程を紹介している。

1. 【読み取り】 社会的事象についての各種資料から必要な情報を集めて読み取る過程。
2. 【解釈】 社会的事象の意味、意義を解釈する過程。
3. 【説明】 社会的事象の特色や社会的事象間の関連を説明する過程。
4. 【論述】 社会的事象についての自分の考えを論述する過程。

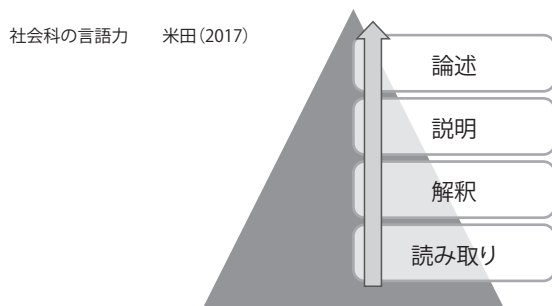


図2 社会科における言語力の整理 (第一筆者作成)

上記の考えを踏まえた上で実践者は、社会科におけ

る言語力レベルと言語活動の内容をまとめた米田 (2017) の説明を、表にして整理している。その中で「③説明」について、言語活動の内容として「複数の社会的事象について、事象間の関連を記述する活動」と紹介し、この際に起こる「主な思考」として「関連」と「総合」を挙げつつ、この実践研究ではこのうちの「関連」のみを取り上げている。

また、「①読み取り、②解釈、③説明、④あてはめ、⑤概念化、⑥論述」の6つの段階を経ることによって言語力を育成することができるという北 (2017) による研究を踏まえて、米田 (2017) との異同を精査している。

以上の先行研究をもとに、実践者は「資料を関連付けて説明する」ためには、① (資料を) 読み取る、② (資料を) 解釈する、③特色や事象間の関連を説明するというプロセスを経る必要があると結論づけている。

#### 3.2 先行研究の成果と課題及び、実践者の研究仮説

実践者は、研究仮説を「社会科において、発見した情報を基に話し合うことで、知識を補い、資料を関連付けて説明する力を高めることができるであろう」としている。この研究仮説は、3つのニーズに依拠している。

1つ目のニーズは、和歌山県の中学生には、説明する力の育成が求められているという実態である。これは、平成30年度全国学力・学習状況調査の和歌山県、中学生の結果に基づいている。「授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していたと思いますか」との設問に対し、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した割合が47.5%であり、全国平均の53.8%を下回っていた。また、小学校は全国との差が-2.6%であるのに対し、中学校は-6.3%であった。これらの数値から、小学校より中学校の方が資料を用いて表現する活動に課題があることを指摘している。

この結果は、学習指導要領解説 社会編 (2018) 「資料から読み取った情報を基にして社会的事象の特色や意味などについて比較したり関連付けたり、多面・多角的に考察したりして表現する力の育成が不十分である」という指摘と重なるものである。

ここから実践者は、和歌山県の中学生には説明する力の育成が必要であるとし、説明する力を育成するために、資料の関連付けに着目して研究を行うことを明らかにしている。

2つ目のニーズは、思考プロセスの可視化の必要性である。溝田 (2019) は、研究の課題として、「資料の関連付けまでの過程を表現物として可視化し、評価すること」を挙げている。これを受けて実践者は、関連付けまでの過程を可視化する手法について、大小の付

- 資料の関連付けまでの過程を可視化する
- 資料から情報を読み取ることが難しい生徒への支援

ここでは、文字言語活動に主に着目し研究を行う。

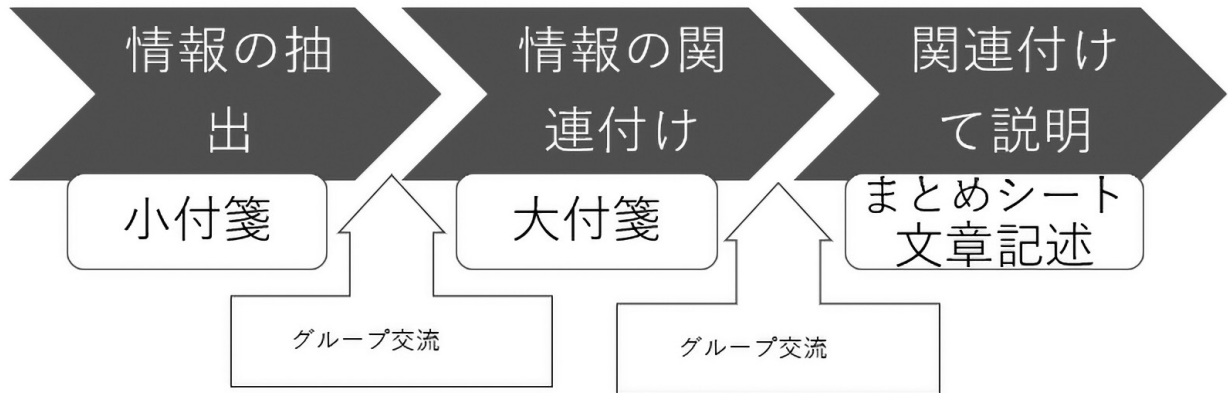


図3 各思考プロセスを位置付けた授業展開(第一筆者作成)

箋を用いることを考案し、実践研究で取組むこととしている。

3つ目のニーズは、資料から情報を読み取ることが難しい生徒への支援の側面である。寺本(2009)は、先行研究の中で、言語力には思考力やコミュニケーション能力などの要素が含まれていると述べている。寺本は、思考力の育成について、適切な題材のもと、適切な人と話し合うことで思考が刺激されるとともに、自分の考えがない状態であっても、他の人の考えに触れることは、自分の考えが生まれるチャンスであると述べている。他者との対話の場面を授業に取り入れることは、自分の考えをもてない生徒にとっては、学習の支えになると述べている。

寺本(2009)の主張を受けて、実践者は、資料から情報を読み取ることが難しい生徒への支援として、他者との対話の場面を授業に取り入れると言明している。

### 3.3 思考プロセスを可視化させる授業

実践者は、1時間の授業の流れを思考のプロセスに合わせてデザインしている。つまり、「①読み取り、②解釈、③説明」を1時間の学習にそれぞれを独立した活動として位置付ける授業計画を考案した。

また、それぞれの活動下の思考を把握するために、実践者は、各段階で付箋やワークシートを配布し、生徒の記述内容の分析を行った。

さらに小グループでの交流を経て、仲間から得た情報をいかに自分の考えに取り入れ、関連付けて説明しているかを見取るために、実践者は4名で構成する小グループのメンバーそれぞれに、異なる色の付箋を配布している(赤、青、黄、緑)。これにより、グループ内の誰の考えを取入れたか、追跡できるようにしてい

る。

このグループ交流は、1時間の授業の中に2度、設定されている。これは、「話し合いによる学習の支援」を目的としている。これにより、一人だけでは資料から情報を読み取ることが難しい生徒の知識を補うことができる実践者は考えている。

### 3.4 研究方法と計画

上述のような付箋の活用方法を用いて、仮説を検証する授業を以下のように実施している。

対象：和歌山市内の公立中学校

第1学年 2学級 51名

実施期間：2018年9月2日～9月30日

(うち、表1の6時間分の授業を複数学級にて実施)

授業計画：中学校社会科の地理的分野の単元「世界の諸地域」のうち、北アメリカ州の第2時(1時間)と南アメリカ州の第6時(1時間)を検証授業としている(表1の太字部分)。本実践においては、各州を多面的・多角的にみることができる資料を用いている。

表1 指導計画

第1時	北アメリカ州の自然環境	1時間
第2時	<b>移民の歴史と多様な民族構成</b>	<b>1時間</b>
第3時	大規模農業と多様な農産物	1時間
第4時	世界をリードする工業	1時間
第5時	世界に広がるアメリカ合衆国の影響	1時間
第6時	<b>南アメリカ州の自然環境</b>	<b>1時間</b>
	計	6時間

### 3.5 思考プロセスを可視化させる授業実践の成果

#### 3.5.1 小付箋の記述分析

第2時の実践では195枚の小付箋が、第6時では477枚の付箋を収集した。

実践者は、小付箋を宮田・奥村（2017）で示されている分析方法をもとに分析した。「存在の指摘」「特徴の指摘」「推論的指摘」という3つの読解プロセスに分類するものである。

分類結果は下記の通りである。「推論的指摘」の記述ができた生徒は、第2時では1名であったのが、第6時では30名と増加していた。

これより、資料見る段階で資料を関連付けてみる視点を獲得できた可能性が示唆された。

鈴木・村山（2016）によると、推論的指摘は、小学校5年生から漸次増加し、中学生になると全体の30%を占めるようになる。段階的にはあるが、生徒の資料を見る視点に変化が見られるようになったと実践者は考察している。

表2 小付箋の枚数の変化と内容分類

分類	内容	第2時枚数(枚)	第6時枚数(枚)
存在の指摘	資料に映っている地理的事象や物事について指摘	7	61
特徴の指摘	指摘した存在の特徴に着目してより詳しい指摘を行うもの	173	326
推論的指摘	指摘した諸事象から資料にはない周辺の様子、事象の背景の指摘、既得知識を用いた指摘	1	79
間違えた読み取り		9	11

#### 3.5.2 大付箋の記述分析

第2時では、26枚の大付箋を収集した。第2時では、3つの資料の関連付けが最大であり、4つ以上の資料の関連付けは見られなかった。

第6時では、115枚の付箋を収集した。ここでは、4つの資料を関連付けた記述も確認できた。

### 4. 評価規準の明確化と適切なフィードバック

実践者は、授業終盤で生徒に記述させるまとめシートを評価の対象としている。思考プロセスでは「③説明する」にあたる活動である。評価規準を明確に設定できている為、それぞれの生徒に適切なフィードバックが可能となっている。それゆえ、第6時の検証授業では、生徒の伸びを確認することができた。

#### 4.1 評価規準の明確化

宮田・奥村（2017）で示されている観点別チェックリストを参考として、教職大学院の教員の意見を取り入れながら作成している（表3）。

チェックリストは、まとめシートの「資料の関連付け」のみに着目し、どれだけの資料が関連付けられているかをみることにした。尚、一つの資料についてよく書いていたとしても、関連付けができていなければ、C評価とした。

表3 評価規準と評価一覧（第一筆者が一部改変）

評価	評価規準
S	4つ以上の資料を関連させて説明することができる。
A	3つ以上の資料を関連させて説明することができる。
B	2つ以上の資料を関連させて説明することができる。
C	資料を関連させて説明することができていない。

#### 4.2 フィードバック

学習指導要領解説社会編（2018）では、学習評価の充実について、「生徒のよい点や進歩の状況などを積極的に評価し、学習したことの意義や価値を実感できるようにすること」が述べられている。本研究では、生徒のまとめシートに対し、個別のコメントを行うことで自分の良い点や進歩の状況を理解するとともに、課題を把握し次の学習に向かえるようにしている。

さらに、次の授業の冒頭には、図4のような「前回授業のgoodまとめ」を配布している。これは、評価を行った中でA評価以上の生徒のまとめシートを一枚のプリントにまとめたものである。これによって、生徒たちが、上手く書いている生徒の見本を見て、自分の課題を理解できるようにした。また、学級全体の書きぶりの傾向を分析したものを「～コメント～」に、goodまとめにするためのポイントを紹介したものを「goodまとめのポイント」に、それぞれ欄を設けて記している。

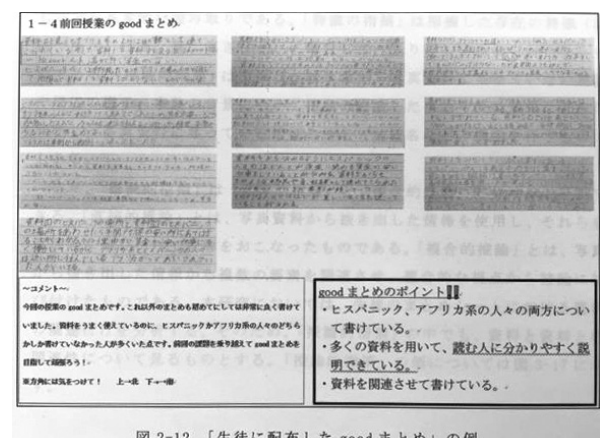


図2-12 「生徒に配布した good まとめ」の例

図4 前回授業の good まとめ

#### 4.3 フィードバックの成果

実践者は、まとめシートへのコメントが生徒の意欲喚起につながったと述べている。以下、実践者の記述を引用する。

本研究においては、「good まとめ」や一人一人へのコメントなどを行ったため、生徒の学習意欲を喚起できた。(略)生徒の「先生 good まとめまだ?」という発言からは、自分の学習成果を他者に伝えたいという充実感があることや他者のと自分とのまとめシートを比較することで自分の現在のレベルを知れることが考えられる。「〇〇君、good まとめに載るのはすごい」という発言からは他者の学びを新たに発見したと考えることができる。また、「次は、私がgood まとめをとる」という発言からは、次の学習に向けた意欲を喚起したことを示している。つまり、本研究は付箋を用いた関連付けを行う授業だけではなく、その後の評価や支援もあってこそ成果を上げることができたということが出来る。

このように、一人一人への適切なフィードバックと、「good まとめ」のプリント配布によって、学習意欲を喚起したこと、また、S評価やA評価のまとめを読むことで、モデリングが可能となり、第6時のまとめシートの評価が全体的に向上する結果となった(表4)。

表4 まとめシート記述評価

評価	評価規準	第2時 人数 (人)	第6時 人数 (人)
S	4つ以上の資料を関連させて説明することができている。	1	14
A	3つ以上の資料を関連させて説明することができている。	12	21
B	2つ以上の資料を関連させて説明することができている。	23	21
C	資料を関連させて説明することができていない。	15	4

#### 5. おわりに

実践者は、「資料の関連付け」と「話し合いによる学習の支援」という課題意識をもって、検証授業を計画し実施した。

「資料の関連付け」では、思考プロセスを1時間の授業の各活動に位置付け、付箋の記述を分析することで、生徒の理解度や課題を把握できるように工夫している。これにより、各思考プロセスを可視化することが

可能となり、それぞれのプロセスにおける生徒の伸びを評価することができた。これは、思考を可視化する手段として、個別に色分けした付箋へ記述させるという取組が有効であった。実践者の取組の大きな成果であるといえる。

実践者の取組は、言語活動をいかに充実させるかという今日的な課題にアプローチしたものである。言語活動と社会科の指導目標を適切に組み合わせている点も学ぶところが大きい。

また、言語活動の充実を目指す授業では、生徒の学びを保障する上で、適切な評価とフィードバックが非常に重要になる。本実践においても、評価規準を明確に設定したことで、適切なフィードバックにつなげることができている。評価とフィードバックこそが、言語活動を充実させ、生徒の学びを担保するものであると言える。社会科の資料を読み取り、関連付けるというコンピテンシーを、生徒に獲得させる有効な取組となった。

「話し合いによる学習の支援」は、「協働的な学び」であるといえよう。今日的な課題である「協働的な学び」の姿を実践者の取組に見ることが出来る。

一方で、実践そのものだけでなく、実践後の分析にも少なからぬ時間を要すること課題として挙げられる。特に、付箋を一つ一つ分析することは、多くの手間と時間を必要とするであろう。この点については、ICTを活用することで、より効率よく、効果的に取り組めるであろう。

グループ交流では、「Jam Bord」上で付箋を交流させることや、「good まとめ」を、「クラスルーム」を通じて配布することが可能である。また、「ロイロノート」によって、S評価、A評価のふりかえりを一覧することも考えられる。これにより、文章の回収、紙面への印刷にかかる手間を効率化することができる。

また、フォルダにこれらの資料を残していくことで、生徒が自身の必要に応じて過去のアーカイブを検索し、現在の活動に活かすことも可能となる。

この実践とその報告書の良さである①研究対象の焦点化、②「関連付けて説明する」ための思考のプロセスを整理し、思考プロセスの授業内での再現、③評価規準の明確化、については、教職大学院における実践研究にとって重要な視点であることは間違いなさだろう。

#### 【レビュー論文】

芝拓実(2020)『言語活動を充実させ、説明する力を高める社会科授業の研究—中学校社会科地理的分野「世界の諸地域」を事例として—』令和元年度和歌山大学教職大学院修士研究報告書。